

THE ROTARY CLUB OF NAGOYA-CHIKUSA



WEEKLY

なごや ちくさ

題字 黒野清宇

名古屋千種ロータリークラブ
 承認 1982年 8月24日
 例会日 火曜日 12:30
 例会場 愛知厚生年金会館
 事務局 TEL763-5110 FAX763-5121
 会長 小坂井 盛朗
 幹事 舎人 経昭
 会報・雑誌委員長 伊藤 健文

No. 19

手を貸そう

Lend a Hand

2003~2004年度 RI会長 ジョナサン・B・マジアベ

きょうの例会

第1021回 平成15年12月9日(火)

卓話 “作家と職人”

会員 鈴木 理之君

先週の記録

第1020回 平成15年12月2日(火)

晴

◆黙禱 会員 加藤 大豊君を偲んで

◆“君が代” “それでこそロータリー”

◆斉唱 “四つのテスト”

◆出席報告

会員 66(58)名 出席 41名

出席率 70.69%

前々回 11月18日(修正出席率) 96.61%

◆ゲスト紹介

中京大学経済学部 教授 河宮 信郎氏

舎人幹事報告

1. 本日例会終了後、年次総会を開催致しますので、全会員そのままお残り下さい。
2. 次回例会終了後、理事役員会を開催致しますので理事役員の方はお残り下さい。
3. ロータリーの友とガバナー月信、佐久間君よりカレンダーを頂いておりますので、お帰りにお持ち下さい。

尾関君 会葬お礼挨拶

先日の母の葬儀につきまして多数の方にご会葬賜わり有難うございました。10年程前までは家族会にも出席し皆様とお話させて頂いた記憶がございます。

母は94歳まで寿命を戴きましたが、昨年8月に左ふとももを骨折しましてからはずっと入院生活を送り、最後は黄疸が出て帰らぬ人となってしまいました。

親を送り、看病生活から抜け出し、いささか悲しみの中にも感慨を感じるのが昨今の気持ちでございます。

皆様のご厚情に心から感謝申し上げ挨拶とさせていただきます。

小坂井会長挨拶

Wカウント！ 生きて日本に帰る為

山での伐採も少し慣れて来た頃の事である。一日の作業が終わる頃ソ連兵がその成果を調べに来る。長さ一米の物差しでラス・ドア・ツリーと伐採の山の長さ高さ計り、何粒米とメモに書き計測の終わった山の伐採の切り口(木口)に木の枝の先を燃やして炭になったものをチョーク代わりとしてVの印を数ヶ所つけてカウント完了分として行くのであった。それを我々は延命の為にゴマかし併せて労働をせずに火に当たって体を休める方法を発案したのである。

それは朝、山に着くとすぐ数名の見張りを出してソ連兵の近づくのを警戒しながら昨日カウント済みの伐採の山の中から印の付いた木を放り出して山を積み直し、積もった雪をはらい今日切って作ったばかりの山のように偽装したのだ。これが第一のやり方である。

次にカウントの時に我々がソ連兵について案内をするのだが既にカウント済みの山を又裏から再度カウントさせて伐採量をごまかした。これが第二のやり方である。

計 報

ホーエー・コーポレーション (株)

代表取締役 加藤 大豊君



11月28日(金)
心不全の為、ご逝去な
さいました。

享年 77歳

昭和57年8月にチャーターメンバーとしてご入会。

創立3年目には会長を務められ、以後数多くの委員長を経験されました。趣味も幅広くクレ射撃やカラオケ等をたしなまれ、名古屋シティマラソンでは永年実行委員長を務められたり、長野オリンピックの際はオリンピックオーダー銀賞を受賞されるなどスポーツ界においても大きな貢献と功績を残されました。

慎んで心よりご冥福をお祈り致します。

又、ソ連兵が計算に弱く二桁の数字十ヶ位の計算にも、もたついてなかなか答えを出さないのを見てダワイと言って親切ゴカシに伝票を取り上げ十二・十六・十八等三行か四行書き足しながら暗算で計算しTOTALをさっさと書いてソ連兵に返すと実際よりも五十粒米位プラスしてあるのを見て満足そうに「オーチンハラショー」と言って上機嫌で引き上げて行く、それを我々は不敵にほくそ笑みソ連兵の姿が見えなくなるとドーッと大笑いをして溜飲を下げたのであった。これが第三の方法である。我々には罪悪感などない。何とか生きて帰らなければならない。帰る為なら何でもやるぞと何よりも体力を消耗させないようにと一生懸命に知恵を絞ってゴマカシた。

ところが、伐採する山が変更になった時にこのゴマカシがバレてしまった。当たり前だ。山で切った報告、トラックで山を降りる時ゲートでのカウント、車で貨車に積載して出した時のカウント、山の伐採数量、そして駅の残量、極めて簡単な計算だからどうしたって合う筈がないのである。全員銃殺かと腹をくくったが、不思議にコワくないのである。

少ない夕食が終わり皆横になった時に通訳やソ連将校がワメキながら行きかう。何やら緊張した雰囲気であった。ままよ何とかなるだろうと自分ながら落ち着いたものだった。なんとこの数字の違いを彼らは徹して伝票の書き換えをする方法を取ったのであった。それもよく考えればそうなるのが当たり前で、もしそんな事が公になったらもちろん我々は銃殺だが、ソ連将校はじめ多数のラーゲル管理に関係している高官が家族ぐるみサハリン送りの罪人になって二度と日の眼をみる事が無い仕置を受ける事になるのである。だから我々の事よりも自分達の保身の為に彼らはそのような決着しかなかったのである。従って我々は罰せられる事はなくホッと胸をなで下ろしやれやれであった。

そこでソ連がいかにも恐ろしい国かという事を我々が知った実例を紹介する事にしよう。ある日長い貨物列車が駅に入った。その中に車両なりに有刺鉄線でぐるぐる巻にしてある五十屯車の有ガイ車を見つけたのである。貨車の出入口の真中の大戸が約三十糎位開けられて四角い木の筒が斜めに出ている。これは中の囚人が用を足す為のものであり四方の窓は全部鉄線で開かないようにぐるぐる巻にしてどう考えても囚人列車である。

警戒のスキをつけてスキ間から見えるソ連人に片言で話をしてみたら、びっくりした。ついこの前までソ連将校少佐(マヨール)であったそうだが、ある日突然秘密警察が自宅に押し入って来て密告によって国民の敵であるという事で裁判も言い訳も何もなく奥さんや小さな子供達までも一緒に貨車へ入れられてこれからサハリンへ連れていかれ強制労働をさせられるのだと言う。可愛い七つ位の女の子と少し大きい男の子の哀れなそして悲しげな眼が何とも痛わしかったが我々も捕虜の身、何も出来ず共産主義は他の政党など全く存在を許さないという体制の恐ろしさを目の当たりにしたのであった。

◆講演

“国家更生法 一小泉改革の行方一”

中京大学経済学部 教授 河宮 信郎氏
(紹介 竹内(眞)君)



金融と財政の連鎖危機―「その場凌ぎ」の行く先は国家破産か。

相次ぐ銀行の倒産は足利銀行で止まりそうにない。足銀倒産の実情は、金融庁が地銀への監査を少し強めたら、則ごまかしが効かなくなったということだろう。とすれば、今後はすべての地銀が監査基準の強化に怯えているにちがいない。ところで、住専破綻以降、金融機関が倒産するたびに「公的資金」注入という言葉が頻繁につかわれるようになった。素人から見ると、なぜ「税金・血税」の投入といわないのか不思議に思われるのではないかと。しかし、事態はもっと深刻である。

「資本注入」に使える税金がもともとない。だから、政府は借入で資金をつくる。この資金が「公的資金」で、税金より不安定な(返済義務を伴う)資金である。ところが、この借入の原資が預貯金だから話がややこしい。資金の真の持ち主は政府でなくて一般市民である。この金が預金保険機構の借入れを通して、危ないし破綻状態の銀行の自己資本になる(これが「資本注入」の意味)。預金保険機構の保険料が年五千億円で、貸付金が累積20兆円、預金保険機構が保険会社として超破綻状態にある。

りそな銀行や足銀の預金が預金保険機構に貸し出され、それがりそな銀行や足銀の自己資本に転化されたら、誰でもおかしいと思う。預金者の金が銀行の自己資本に転化しているからである。しかし、注入した公的資金が焦げつきになったら、その分は政府の(実は納税者の)不良債権になる。(民間)不良債権が国家不良債権になる(不良債権の水平移転)。金融機関が危機に陥るたびに、不良債権が水平移転される。そして、金融機関を救う立場にある政府自体が、税収40兆円強で600兆円の債務を負う。他の機関を救うどころか、自分が救済を必要としている。政府が「救済」を求める先は納税者である。しかし、政府はその納税者を痛めつける政治をしているのではないかと・・・。

◆ニコボックスは次回掲載と致します。

年次総会

1. 2004~2005年度理事役員の件
※全会員に承認されました。

次回例会

平成15年12月19日(金)

年末会員・家族懇親会

於：名古屋東急ホテル 18時